

教員養成大学の初年次生における体育の学習観に関する質的研究

A Qualitative Study on First-Year Teacher Training University Undergraduates' Learning Concepts of Physical Education

兄 井 彰 村 川 誠 須 崎 康 臣

Akira ANII
保健体育研究ユニット

Makoto MURAKAWA
保健体育研究ユニット

Yasuo SUSAKI
島根大学

(令和6年9月30日受付, 令和6年12月23日受理)

Abstract

This study purposes to clarify the learning concepts of physical education held by first-year students at teacher training universities through the use of the KJ method for analysis. The students' learning concepts of physical education were categorized into 13 themes: cooperation and collaboration, communication, motor skills, the joy and importance of engaging in physical activity and sports, attitudes toward participating in sports, knowledge related to physical activity and sports, health and fitness, rules and etiquette in sports, engagement in sports, personal growth, safety management, the significance of extracurricular activities, and changes in mood through physical activity. Notably, four themes were confirmed as central to the students' learning concepts of physical education: "social skills", "the joy and appeal of engaging in physical activity and sports", "motor skills" and "knowledge related to physical activity and exercise." Additionally, attitudes such as taking on challenges and making efforts, which involve actively engaging in physical activity, were identified as important aspects of their learning concepts. This understanding of physical education is suggested to be a belief system constructed through primary and secondary education, which significantly influences the students' perspectives on physical education in higher education.

Ⅰ. 緒言

学習者は「学習とはどのようなものか」(広義の学習観)や「効果的な学習方法(方略)はどのようなものか」(狭義の学習観)という信念に基づいて学習行動を取るとされる(赤松, 2022; 植坂, 2010)。この学習に対する信念である学習観は、「学習者が持つ学習に対する一定の認識」と定義されており(鹿毛, 2013), 学習行動を規定する要因となる。そのため, 対象者の学習観を理解することは, 対象者の学習指導において教育効果を高めるために重要である。

一般的な学習観と同様に, 体育という教科(領域)固有(赤松, 2022)の学習観も, 広義と狭義

の2つに分類され, 広義の体育の学習観は「体育とは何を学ぶ教科か」という科目の本質に対する信念であり, 狭義の学習観は「体育ではどのような学習方法が効果的か」に対する信念を指す。広義の学習観は, 運動能力の向上や体力の保持増進, 運動に関する知識の習得, さらに社会性や協調性の育成といった体育が教育で果たす役割を反映すると考えられる。一方, 狭義の学習観は, 体育の効果的な学習方法や学び方に焦点を当てた方略として捉えられる。本研究では, 特に広義の体育の学習観に焦点を当て, 教員養成大学の初年次生がどのように体育を捉えているかを分析する。

体育における学習観に関する知見はまだ十分に

明らかにされていないが、学習方略との関係を検討している先行研究が多い。辰巳（2006）は、小学生の運動に関する学習観を調査し、「方略志向」「環境設定志向」「練習量志向」「教授者志向」の4つの志向性を確認した。その結果、「方略志向」の子どもたちが積極的な学習行動を取ることが期待されることを明らかにしている。また、小野ほか（2018）や Ono and Kaji（2020）は、体育学習観尺度を開発し、小中学生のそれぞれにおいて「運動技術の習得」、「コミュニケーション能力の涵養」、「身体と運動に関する知識の修得」、「運動の魅力の感受」、「身体能力の向上」という5つの因子を抽出し、それらが学習方略と関連していることを示した。さらに、江藤（2022）は、一般的な体育学習観ではなく授業に特化した学習観に焦点を当て、「運動実践志向」と「協働的学習志向」の2因子を抽出し、これらも学習方略との関係が示唆されている。

こうした研究結果を踏まえると、初等教育や中等教育を通じて構築された体育の学習観は、教育的成果の一つとして位置づけられる。また、将来体育を教える教員養成大学の初年次学生にとって、その学習観は高等教育における体育科教育への準備指標となる可能性が高い。この体育の学習観は、大学での専門教育を通じて変容し、彼らの指導行動を左右する重要な要因となるため、初年次生がどのような学習観を持っているかを把握することは、大学教育における教育プログラムの開発において重要である。

学生における体育の学習観を検討した研究では、教員養成段階の学生が体育授業において学習及び指導をどのように捉えているかについて明らかにしている。嘉数（2012）は、体育教師志望の学生が「目指す体育授業」として、「生徒を動機づける授業」、「雰囲気の良い授業」、「理想的な授業」の3つの体育授業観を抽出している。また、嘉数・岩田（2013）は、教員養成段階の学生における「目指す体育授業」を調査し、「体育授業において身につけさせたいこと」、「体育授業における生徒たちの雰囲気」、「体育授業の実践」の3つの授業観を抽出し、この授業観が教育実習前後で変容することを明らかにしている。さらに、嘉数・江藤（2014）は、体育教師志望の学生において、「教科の指導法に関する科目」の授業前後で授業観がどのように変容するかを検討しているが、従来のカテゴリーに変容が見られなかったとしている。江藤（2019）は、各教科の指導法に関する科目「体育科教育研究」を受講した小学校教

師を志望する学生の体育授業の指導観（学習観）について講義前後の変容を検討している。その結果、体育授業指導観を「授業の実践」、「児童に身につけてほしいこと」、「児童の学習」の3つに分類し、その変容を確認している。白石ほか（2020）は、保健体育科教員養成課程の初年次生を対象に、小野ほか（2018）が開発した「中学生用体育学習感尺度」を用いて調査し、教職志望度によって、違いが見られることを報告している。加えて、王ほか（2023）は、先述の嘉数（2012）が作成した体育授業観に関する質問紙を用いて、教員養成段階の学生に調査し、年次により違いが見られることを報告している。さらに、江藤・三田（2023）は、教科の指導法に関する科目を受講した学生に対し、小野ほか（2018）が開発した「中学生用体育学習感尺度」を用いて調査し、「運動技術の習得」、「コミュニケーション能力の涵養」、「身体と運動に関する知識の修得」において、授業後に因子得点が向上し、学習観の変容が見られることを報告している。このように、教員養成段階の学生において、体育の授業観や指導観を含めた学習観が、形成されており、その変容の在り方がある程度明らかになっている。

そこで本研究では、先行研究の知見を踏まえ、教員養成大学に入学した初年次生が持つ広義の体育の学習観に焦点を当て、彼らがどのように体育を捉えているかといった高等教育で専門的に体育を学ぶ前の準備状況について明らかにすることを目的とする。特に、初等教育及び中等教育の過程で形成された体育の学習観が高等教育の専門教育にどのような影響を及ぼすかを想定して、教育プログラムの開発や指導方法の改善に資することを目指す。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象者

福岡教育大学の初等教育教員養成課程に所属する学生で、入学当初（2024年4月）に「体育科指導法」を受講した2クラスの114名から事象を収集した。

2. 調査内容

調査対象者に次のような質問を行った。「体育及び保健体育で何を学ぶのか（教えるのか）について回答して下さい。体育では（ ）を学ぶ（教える）の（ ）の中に語句を書き込んで下さい。」という質問であった。回答は、自由記述方式で対象者が思いつく限り（最大10まで）、できるだけ多く事象を記述するように求めた。

3. 分析

体育の学習観に関係すると考えられる 650 の事象を収集した。この項目について KJ 法 (川喜多, 1967 : 1970 : 1986) を用いて分析した。この KJ 法の特徴は、以下のようにまとめられている (和ほか, 2011)。
①データ収集と分析を別々に行う、
②分類と集約を通して、分析前に気付かなかったことを創造的に作り出す、
③単なるデータの分類ではなく、分類と結合によって全く新しい意味のまとまりを見いだしていく、
④語りの背後にある構造を読み取ることができる、
⑤経験や思いをある程度まで一般化できる、
⑥カテゴリー化して見出しをつけることによって、要約、抽象化することができる。また、KJ 法は、一見まとめようもない複雑多様な情報やデータを、個人の思考だけではなく、複数人によって類似性や共通性のあるものごとにカテゴリー化し、それを繰り返すことで新たな意味や構造を理解する方法である (川喜田, 1967)。

KJ 法を始める前に、対象者の回答を事象ごとにそのエッセンスを 1 項目について 1 枚のカードに書き込んで分析対象とした。その後、KJ 法の基本的ステップ (ラベルづくり・グループ編成・A 型図解・B 型文章化) を行った (川喜田, 1986)。

上記の累積 KJ 法により専門領域が体育科教育及びスポーツ心理学である大学教員 1 名と教員養成課程の保健体育専攻に所属する大学 4 年生 6 名で分析を行った。その後、コーチ学を専門とする大学教員と体育心理学を専門とする大学教員で内容を確認した。

Ⅲ. 結果

収集した延べ 650 項目について、KJ 法を用いて体育の学習観を分類し、カテゴリー化を行った。その結果が、表 1 である。体育の学習観は、以下のカテゴリーに分類された。協力や協調性及びコミュニケーション、運動技能、運動やスポーツする楽しさや大切さ、運動やスポーツの楽しさや魅力、運動やスポーツに取り組む態度、運動やスポーツに関する知識、健康や体力、運動やスポーツのルールやマナー、運動やスポーツ、自己成長、安全管理、部活の大切さ、体を動かすことによる気持ちの変化の 13 カテゴリーである。特に、項目数が 100 を超えたカテゴリーは、協力や協調性及びコミュニケーション、運動技能、運動やスポーツする楽しさや大切さ、運動やスポーツの楽しさや魅力の 4 つであった。

以下では、各カテゴリーの詳細を示す。

1. 協力や協調性及びコミュニケーション

このカテゴリーは、友だちや仲間との協力や教え合い、協調性、コミュニケーションなど、社会的スキルや対人関係に関わる内容で構成されている。「友だちや仲間との協力」のサブカテゴリーが最も多くの項目を占め、協力が体育の学習として重要視されていることを示している。また、「協調性」も多くの項目を含んでおり、体育を通じた協調性の育成が重要であると捉えられている。

2. 運動技能

このカテゴリーは、体の動かし方や使い方、運動の仕方、運動技能やその向上、運動の継続や習慣化に関する内容で構成されている。特に「体の動かし方や使い方」に多くの項目が集中しており、体の動かし方や使い方が体育の学習であると考えられていることを示している。

3. 運動やスポーツする楽しさや大切さ

このカテゴリーは、実際に体を使い、運動やスポーツする楽しさや大切さ、おもしろさといった運動やスポーツの情緒的な側面に関する内容で構成されている。特に「体を動かす楽しさ」や「運動やスポーツする楽しさ」が多くの項目を占め、運動すること自体が学習として捉えられていることを示している。

4. 運動やスポーツの楽しさや魅力

このカテゴリーは、運動やスポーツの達成感や魅力など、実際に体を動かすことだけでなく、運動がもたらす快感情や意義に関する内容で構成されている。「運動やスポーツの楽しさ」が最も多くの項目を占めており、運動やスポーツの楽しさが体育の学習であると捉えられていることを示されている。

5. 運動やスポーツに取り組む態度

このカテゴリーは、挑戦やあきらめない姿勢、努力することなど、主体的かつ積極的に運動やスポーツに取り組む態度に関連する項目で構成されている。これらの内容から、運動に主体的に取り組む態度を学習することが体育であると捉えられていることを示している。

6. 運動やスポーツに関する知識

このカテゴリーには、体や健康に関する知識、運動の仕組みや方法などに関する内容で構成されている。この内容から、体育を通じて、体や健康に関する知識を深めることが学習であると捉えられていると考えられる。

7. 健康や体力

このカテゴリーは、運動と健康の関係や体力向上に関連する項目で構成されている。この内容は、

健康の保持・増進や体力向上が、体育において学習する重要なテーマであることを示している。

8. 運動やスポーツのルールやマナー

このカテゴリーは、ルールやマナー、スポーツマンシップ、礼儀、規律に関する内容で構成されている。この内容から、スポーツのルールやマナー、スポーツマンシップが体育で学習する事柄と捉えられていることを示している。

9. 運動やスポーツ

このカテゴリーは、運動やスポーツそのもの、体を動かすことに関連する内容で構成されている。単純に運動を行うことが体育の学習として捉えられていることを示している。

10. 自己成長

このカテゴリーは、自己成長、頑張ること、忍

耐力、思考力、自己表現、人間力など、個人の成長に関する内容で構成されている。このことから、体育が自己成長の機会として捉えられていると考えられる。

11. 安全管理

このカテゴリーは、けがの防止策や安全に運動やスポーツすることなどの内容で構成されている。このことから、安全に運動を行うことが体育の学習であると捉えられていると考えられる。

12. その他

「部活の大切さ」と「体を動かすことによる気持ちの変化」はそれぞれ1項目であったが、どのカテゴリーにも含まれない独立した内容として収集された。

表 1. 教員養成大学の初年次生における体育の学習観の分類と項目数

カテゴリーとサブカテゴリー		項目数	カテゴリーとサブカテゴリー		項目数
1) <u>協力や協調性及びコミュニケーション</u>		163	5) <u>運動やスポーツに取り組む態度</u>		40
1 友だちや仲間との協力	55		1 挑戦すること	14	
2 協調性	27		2 あきらめないことの大切さ	7	
3 コミュニケーション	16		3 努力すること	7	
4 友だちや仲間との教え合い	14		4 主体的に取り組む態度	4	
5 チームワーク	9		5 運動への取り組み	3	
6 人との接し方	9		6 意欲的な態度	2	
7 友だちや仲間の大切さ	8		7 勇気	2	
8 チームスポーツの仕方	6		8 物事に取り組む姿勢	1	
9 友だちや仲間への思いやり	5				
10 応援すること	4		6) <u>運動やスポーツに関する知識</u>		39
11 友だちや仲間との助け合い	3		1 体に関する知識	16	
12 集団行動	2		2 運動やスポーツに関する知識	9	
13 団結力	2		3 健康になるための方法	7	
14 人間関係	2		4 体力の高め方	3	
15 共に生きる力	1		5 健康の保持増進	2	
			6 運動技能の高め方	1	
2) <u>運動技能</u>		111	7 運動の仕組み	1	
1 体の動かし方や使い方	58				
2 運動の仕方	24		7) <u>健康や体力</u>		29
3 運動技能	7		1 運動と健康の関係	11	
4 運動技能の向上	5		2 体力の向上	10	
5 運動継続・運動習慣	5		3 体力	3	
6 運動能力	5		4 健康や体力	2	
7 基礎的な運動	5		5 体の大切さ	1	
8 運動の基礎	2		6 自分の体力のレベル	1	
			7 適度な運動の大切さ	1	
3) <u>運動やスポーツする楽しさや大切さ</u>		104	8) <u>運動やスポーツのルールやマナー</u>		22
1 体を動かす楽しさ	33		1 ルールやマナー	10	
2 運動やスポーツする楽しさ	22		2 スポーツマンシップ	7	
3 運動やスポーツする大切さ	13		3 礼儀	3	
4 運動やスポーツへの取り組み方	10		4 規律を守ること	2	
5 体を動かすことの大切さ	9				
6 体を動かすおもしろさ	5		9 <u>運動やスポーツ</u>		16
7 運動やスポーツすること以外の楽しさ	4		1 運動やスポーツ	8	
8 運動やスポーツする喜び	4		2 体を動かすこと	6	
9 運動やスポーツするおもしろさ	2		3 運動やスポーツをすること	2	
10 体を動かすおもしろさ	1				
11 体を動かす重要性	1		10) <u>自己成長</u>		11
4) <u>運動やスポーツの楽しさや魅力</u>		103	2 自己成長	5	
1 運動やスポーツの楽しさ	43		3 頑張ること	2	
2 達成感	17		1 我慢する力	1	
3 運動やスポーツの魅力	12		4 思考力	1	
4 運動やスポーツのおもしろさ	11		5 自己の表現方法	1	
5 運動やスポーツのメリット	5		6 人間力	1	
6 成功体験	5				
7 競争のおもしろさ	4		11) <u>安全管理</u>		10
8 運動やスポーツの意義	2		1 けがの防止策	4	
9 運動やスポーツへの興味	2		2 安全に運動やスポーツすること	3	
10 スポーツで得られる経験	1		3 けがをしない正しい体の使い方	2	
11 運動やスポーツする理由	1		4 日々の生活での安全	1	
			12) <u>部活の大切さ</u>		1
			13) <u>体を動かすことによる気持ちの変化</u>		1
			計		650

Ⅳ. 考察

本研究の目的は、教員養成大学に入学した初年次生が持つ広義の体育の学習観について明らかにすることが目的であった。その結果、初年次生が持つ体育の学習観は、協力や協調性及びコミュニケーション、運動技能、運動やスポーツする楽しさや大切さ、運動やスポーツの楽しさや魅力、運動やスポーツに取り組む態度、運動やスポーツに関する知識、健康や体力、運動やスポーツのルールやマナー、運動やスポーツ、自己成長、安全管理、部活の大切さ、体を動かすことによる気持ちの変化の13カテゴリーに分類できた。

これらの内容を見ると、先行研究（江藤，2022；小野ほか，2018）で見られた体育の学習観とほぼ同じカテゴリーを確認できる。

まず、収集した項目数を考慮すると、社会的スキルや人間関係に関連する協力や協調性及びコミュニケーションに関する項目が最も多かった。このことから、多くの学生が体育を通じて社会的スキルや人間関係を学ぶと考えていることが示唆される。

また、運動やスポーツの楽しさや大切さのカテゴリーに、運動やスポーツの楽しさや魅力のカテゴリーの項目を加えると、200項目を超え、全項目数の4分の1以上を占めている。このことから、多くの学生が、実際に体を動かすことを含め、運動や体育の楽しさや魅力について学ぶと考えていることがわかる。

さらに、運動技能のカテゴリーにも多くの項目が収集されており、運動技能を体育で学ぶ重要な事柄と捉えている学生が多いと推測される。

一方、運動やスポーツに関する知識、健康や体力、運動やスポーツのルールやマナーの3つのカテゴリーは、小野ほか（2018）が開発した中学生用体育学習観尺度の下位尺度の一つである「身体と運動に関する知識の修得（運動やスポーツのマナー、運動やスポーツの成り立ち、心身に与える影響・効果、スポーツの意義、運動やスポーツのルール）」と酷似している。このことから、本研究においてもこれらの3つのカテゴリーは、身体と運動に関する知識としてまとめることが可能である。

以上のことから、「社会的スキル」、「運動やスポーツの楽しさや魅力」、「運動技能」、「身体と運動に関する知識」の4つが、学生が体育で学ぶ内容として捉えていると考えられる。

これらの4つの体育の学習観は、小野ほか（2018）が開発した中学生用体育学習観尺度の

「コミュニケーション能力の涵養（他者を理解することの大切さ、他者と協力すること、他者から教わるときの態度、他者との心の距離の取りかた、他者へのアドバイスのしかた）」、「運動の魅力の感受（運動することの喜び、勝敗を競う楽しさ、運動することの楽しさ）」、「運動技術の習得（運動やスポーツの戦術、体の上手な動かししかた、うまく運動するためのコツ、色々な用具を使った運動のしかた、色々な種類の運動のしかた）」、「身体と運動に関する知識（前述）」と対応している。しかし、この尺度の「身体能力の向上（持久力、筋力、柔軟性（やわらかさ）、瞬発力を養う）」の因子については、本研究では一つのカテゴリーとして抽出できなかった。この理由は、明確ではないが、おそらく、今回の対象学生は、体育授業だけで身体能力の向上が可能だと考えておらず、身体能力を体育で直接的に学ぶ内容として捉えていなかったためだと考えられる。

また、学生が体育で学ぶ内容として捉えている「社会的スキル」、「運動やスポーツの楽しさや魅力」、「運動技能」、「身体と運動に関する知識」の4つは、友添（2010）が示した体育の教科内容領域である「社会学習」、「情意学習」、「技術学習」、「認識学習」にそれぞれ対応している。また、身体リテラシー（Physical Literacy）を評価する尺度として開発されたPhysical Literacy評価尺度（2023）の「身体的領域」、「心理的領域」、「社会的領域」、「認知的領域」にも対応している。このPhysical Literacy評価尺度（2023）は、学習指導要領との対応も検討されている（遠藤ほか，2024）。

さらに、2024年度に公表されたアメリカのSHAPE（Society of Health and Physical Educators）によるナショナルスタンダードは、「スタンダード1：多様な運動技能を身につける」、「スタンダード2：運動およびフィットネスの概念に関連する知識を活用する」、「スタンダード3：運動を通じて社会的スキルを発展させる」、「スタンダード4：個人的な技能を発展させ、運動の個人的な利点を理解し、身体活動に取り組む」の4つを挙げている。このスタンダードと本研究で見られた4つの体育の学習観は、一定程度対応が確認できる。

これらのことから、「社会的スキル」、「運動やスポーツの楽しさや魅力」、「運動技能」、「身体と運動に関する知識」の4つは、体育で学ぶ内容や領域、基準として対応しており、体育の学習観として妥当であると推察される。

次に、運動やスポーツに取り組む態度と自己成長に関しては、自己成長のサブカテゴリーに「頑張ること」や「我慢する力」が含まれており、これらは運動やスポーツに取り組む態度として一つにまとめることができる。挑戦すること、あきらめないこと、努力することといった態度は、先行研究で開発された尺度や学習内容、学習領域、基準等には類似したものが見られず、本研究独自に抽出された体育を通じて学ぶべき事項であると考えられる。

最後に、けがの防止策や安全に運動やスポーツを行うこと、けがをしない正しい体の使い方といった安全管理に関しては、現行の学習指導要領における保健の見方・考え方に示されており、体育だけでなく保健や他の教科を通じて学ぶ内容であり、体育の学習観の一部として捉えることができるカテゴリーである。

V. まとめと今後の課題

本研究は、教員養成大学の初年次生が持つ「体育で学ぶこと」の回答としての体育の学習観を明らかにすることを目的に、KJ法を用いて分析を行った。その結果、体育の学習観は13のカテゴリーに分類された。特に「社会的スキル」、「運動やスポーツの楽しさや魅力」、「運動技能」、「身体と運動に関する知識」の4つが、学生が考える体育の学習観として確認された。また、挑戦することや努力することなど、運動やスポーツに取り組む態度も学生が体育の学習観として捉えていることが明らかになった。この学生の体育の学習観は、初等教育や中等教育を通じて構築された信念であり、高等教育における体育への考え方に強い影響を与えると考えられる。

さらに、学生は体育の学習を通じて社会的スキルや協調性の育成が重要であると感じており、運動そのものの楽しさを学習の中心に据えていることも明らかになった。これらの知見は、今後の教員養成課程における教育カリキュラム開発において、初年次生の体育に対する準備状況や学習観を考慮する必要性を示唆している。特に、社会的スキルや運動技能、運動やスポーツに関する知識の習得といった資質・能力の育成に加えて、子どもの運動意欲に深く関わる運動の楽しさや主体的に運動に取り組む態度を理解させることが、教員養成において重要であると示唆される。

本研究では、教員養成大学の初年次生における広義の体育の学習観を明らかにすることができたが、いくつかの課題が残されている。第一に、体

育の学習観の変容に関する縦断的な調査が必要である。今後の研究では、初年次生の体育の学習観が高等教育や教育実習などの実践指導を通じてどのように変容するのかを追跡調査し、体育の学習観と実際の教育現場での指導方法との関連性をさらに明確にしていくことが重要であろう。第二に、体育の学習観の変容が体育指導者としての成長にどのように寄与するかを明らかにする必要がある。学生の体育の学習観をどのように変容させれば指導力が向上するのかが明らかになれば、効果的な教員養成プログラムの開発につながると推測される。

文献

- 赤松大輔（2022）学習観に関する研究の概観と展望—「教科固有の見方・考え方」と「教科を超えた資質・能力」の育成に向けて—。教育心理学研究, 70, 419-438.
- 江藤真生子（2019）小学校体育授業の指導観の変容に関する事例研究—養成段階の学生を対象とした教科の指導法に関する講義に着目して—。日本教科教育学会誌, 42（3）：83-94.
- 江藤真生子（2022）沖縄県の小学校高学年児童の体育授業における学習観と学習方略に関する研究。九州体育・スポーツ学研究, 37, 1-11.
- 江藤真生子・三田沙織（2022）小学校体育授業における児童の学びについての教師の認識に関する一考察。九州地区国立大学教育系・文系研究論文集, 9（1）, 15.
- 江藤真生子・三田沙織（2023）教科の指導法に関する科目における教師志望学生の体育授業の学習観及び学習方略に関する事例的検討—教職志望度に着目して—。琉球大学教育学部紀要,（102）, 169-178.
- 鹿毛雅治（2013）学習意欲の理論—動機づけの学習心理学。金子書房.
- 嘉数健悟（2012）体育教師志望学生の体育授業観に関する事例研究—因子構造と学年間の差異—。広島大学大学院教育学研究科紀要第二部, 61：291-297.
- 嘉数健悟・岩田昌太郎（2013）教員養成段階における体育授業観の変容に関する研究—教育実習の前後に着目して—。体育科教育学研究, 29（1）：35-47.
- 嘉数健悟・江藤真生子（2014）体育教師志望学生の授業観の様態に関する研究：「教科の指導法に関する科目」の授業前後に着目して。九州体育・スポーツ学研究, 28（2）, 1-11.

- 川喜田二郎（1967）発想法—創造性開発のために．中央公論社．
- 川喜田二郎（1970）続・発想法—KJ法の展開と応用．中央公論社．
- 川喜田二郎（1986）KJ法—混沌をして語らしめる．中央公論社．
- 王 建国・谷尾康太・上原禎弘（2023）教員養成段階における体育授業観に関する研究—教育大学を事例に．兵庫教育大学学校教育学研究, 36, 149-154.
- Ono, Y., & Kaji, M. (2020). Study on the concept of learning by elementary school students in physical education classes in Japan. *Journal of Physical Education and Sport*, 20(3), 1415-1422.
- 小野雄大・友添秀則・高橋修一・深見英一郎・吉永武史・根本想（2018）中学校体育授業における学習者の学習観および学習方略の関連に関する研究．体育学研究, 63 : 215-236.
- SHAPE America (Society of Health and Physical Educators) (2024) National Physical Education Standards. Human Kinetics. (<https://www.shapeamerica.org/standards/pe/new-pe-standards.aspx>).
- 白石智也・房野真也・森木吾郎・高田康史・前田一篤・松本佑介・藤島廉（2020）保健体育科教員養成課程入学者の体育学習観に関する調査研究：教職志望度の差異に着目して．人間健康学研究, 3, 51-57.
- 鈴木宏哉・森丘保典・青野博（2023）子どもを対象とする日本版 Physical Literacy 評価法の試案．内藤久士編, 身体リテラシー (Physical Literacy) 評価尺度の開発第2報, 令和4年度日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究報告Ⅱ第2報, 公益財団法人日本スポーツ協会, pp.76-82.
- 辰巳智則（2006）体育授業における運動に関する学習観と学習行動との関連．天理大学おやさと研究所年報, (13) : 55-60.
- 友添秀則（2010）体育の目標と内容．高橋健夫ほか編著, 新版体育科教育学入門．大修館書店, pp.30-38.
- 遠山健太・松永美咲・岡出美則・鈴木 宏哉（2024）．内藤久士編, 身体リテラシー (Physical Literacy) 評価尺度の開発第3報, 令和5年度日本スポーツ協会スポーツ医・科学研究報告, 公益財団法人日本スポーツ協会, pp.62-74.
- 植坂友理（2010）メタ認知・学習観・学習方略．市川伸一編, 発達と学習．北大路書房, pp.172-200.